人とかかわる力を育むために

斉藤　史江

はじめに

幼稚園の教師になって一年半が過ぎようとしています。この一年半、未熟ながらも、子どもたちと共に様々な経験をする中で、気づかされたことは数知れず、子どもたちからたくさんのことを学ばせてもらっています。また、日々の保育について、園の先生方とディスカッションすることを通して、私自身、どんな願いを持って子どもたちに向き合っているのだろうか、と教師としての自分自身を見つめ直すことも多々あります。園の先生方と話し合う中で、最近、常に話題になることに「人とかかわる力を育んでいけたらいいね」ということがあります。それは、年々、人とのかかわりの下手な子どもたちが増えている気がする、という感想をほとんどの先生方が持っているからです。教師一年目の私に

とっては、以前の子どもたちと比べて考えることはできませんが、確かに、なかなかうまく人とかかわることができない幼児は多いような感じます。そこで、「人とかかわる力を育む」ために教師として何が大切なのかを私なりにT君の事例を通して考えていきたいと思います。

友達への関心はあるが、自分の思いをうまく伝えられないT君の事例（二年保育四歳児）

入園当初のT君の様子

入園当初から、遊びに対して好奇心旺盛で、友達に対しても「何やってるんだろう、一緒に遊びたいな」というように、強く関心をもっていた。しかし、友達の持っている物を何も言わずに取り上げてしまったり、わざと友達の作った積み木の基地を壊したり等、自分の思いを言葉ではなく、行動で表しがちで、伝わりにくく、トラブルが生じやすかった。

教師の願い

自分の思いを言葉で表現することができるようになれば、もっと楽しく遊べるのでは。そのためには、T君の気持ちを教師が代弁していくことで、T君自身が自分の思いの表現の仕方に気付いていってくれたらいいのにな……。

五月になって

教師に対して、「～して欲しい」という思いを、肩を叩いたり、指さしなどの動きで伝えるようになってきた。友達と遊んでいる時には、言葉がでる場面もたまに見られるが、何かトラブルが起こると口を閉じてしまい何も言わなくなってしまう。

事例1　五月中旬『電車ごっこ』

T君は、かなり時間をかけてボール紙で三両つなぎの電車を作り上げた。そこに、Mちゃん、Kちゃん、Sちゃんが「わあ、すごい」とやってきた。T君は三人の手を引っ張り電車に乗せようとしたが、

全員が乗るには狭くSちゃんだけ乗れずにいた。

S　「Sちゃんも乗りたい」

T　電車にのった二人を無理やり押す

M・K「痛い痛い」電車を降りる

T　再び力尽くで乗せようとする

教師「T君、みんなに乗ってもらいたいのね、でも
　そんなに引っ張ったら手が痛いよ」

T　三人が嫌がれば嫌がるほど強く引っ張る

教師「もう一つ電車作ってつなげるとみんなのれる
　かもしれないよ」

――四人で電車を作ってつなげ、しばらく電車
　ごっこを楽しむ――

M・K・S「もう、降りる」

T　「乗れ」Sちゃんの手を引く

S　「T君が意地悪した！」泣きながら教師に言う

T　電車に乗って欲しいんだというように、電車を
　指でさして訴える

教師「T君ね、電車に乗って欲しいんだって」

S　「もう嫌なの！」

――その後、K、M、Sちゃんはその場から離れ
　て電車に乗ろうとはしなかった――

①自分の思いをどのように出しているのだろう？

・T君は、自分の作った電車にM、K、Sちゃんに乗ってもらいたいという気持ちから、強引にこの友達を押したり、引っ張ったりしている。このことから、T君には自分のやりたいことがしっかりとあり、その自分の思いを体全体の動きで表しているが、友達には伝わっていないと考えられる。

②友達とどのようにかかわっているのだろう？

・偶然に電車に興味を持ったM、K、SちゃんがT君と遊ぼうとしたが、TくんはM、K、Sちゃんと一緒に遊びたいという思いよりも、お客さんになってくれる友達を求めていたと思える。

③教師の援助はどうだっただろうか？

・友達とかかわりたいというT君の気持ちを受けと

めて、周囲の幼児にT君の思いを仲立ちしているが、うまく伝わっていない。そのため、周囲の幼児は、T君の強い動きだけが強く感じられ、T君との遊びを楽しめないでいる。

二学期になって

あまりかかわりのなかった友達とも遊ぶようになり、自分の思いを言葉で相手に伝える姿が、少しずつ見られるようになってきた。学級の幼児も「T君って、きっと心の中でお話ししてるんだ」と、T君を受けとめるようになってきた。教師に対しては、指さし、うなずき、ジェスチャーなどで自分の思いを伝えようとしている。しかし、何かトラブルが生じたりすると、手が出てしまい、口を閉じてしまう。

事例2　十一月下旬『Y君とウルトラマン』

T君は、昨日一緒に遊んだY君を捜しに廊下のほうへ出て行った。しばらくして、Y君が泣きながら教師のところへやってきた。その後ろからT君もついて来た。

Y　「先生、今日はウルトラマンやらないのに、T君がやるって言うんだよそれで僕が嫌って言ったらぶった！」

教師「そうね、Y君今日は工場作って遊んでいるんだもんね」

T　首を振って、ウルトラマンのポーズしたりして、ウルトラマンごっこやりたいんだ、と体で表している。

教師「T君、昨日のウルトラマンごっこまたやりたいんだ」

T　うなずく。

教師「でもぶったりするのはダメ。Y君今日は、工場作ってるんだって。Y君にだってやりたいことあるんだよ」

Y　「工場作るんだ！」と廊下に行く。

T　Y君の後を追いかけ、Y君が工場を作って遊ぶ

のを見ている。

教師「T君、困ったねえ。Y君とウルトラマンやりたいんだよね、他にウルトラマンやる人いないかなあ」

T　しばらく様子を見ていたが、その後工場ごっこに入って遊ぶ。

事例1と事例2を通して

T君はどのように変わったか？

事例1でのT君は、M、K、Sちゃんと一緒に遊びたいというよりも、自分の作った電車のお客さんを求めていた。事例2では、Y君と一緒に遊びたいという思いが強くあり、そのために自分のやりたかったウルトラマンをあきらめ、Y君の遊びに加わろうとする等、自分の気持ちをコントロールしようとする姿が見られる。T君のこの変容は、T君自身が友達とかかわって遊ぶことを楽しいと感じているのと同時に、「T君、心の中でお話ししてるんだね」とT君の姿を受け止めようとする周囲の友達の育ちがあったことが大きいと思われる。

教師の援助はどうだったか？

一学期は、T君に対して自分の思いを言葉で表してほしいと願い、遊びの場でT君の思いを言葉で伝える等の援助をしてきた。しかし、T君と周囲の幼児とのかかわりが深まるにつれて、T君が言葉で自分の思いを表現できなくても、遊びの中で友達に受け入れられている姿から、私自身の心の中でT君に対して、言葉で表現してほしい、と言葉による表現のみにこだわる気持ちが薄れてきた。

私はT君を、自分の思いがうまく伝えられない幼児ととらえ、言葉のみの援助にこだわってきた。し

かし、特に入園当初の四歳児は、それまでの人とのかかわりの経験の個人差が激しいため、遊びの楽しさを通して友達との接し方や、遊び方、遊びの決まりに気付かせていく援助が大切だということに、T君の姿を追うことで気づかされた。

おわりに

T君の姿を通して、私自身、教師として都合の良い見方をしていたことに気づかされました。大人は言葉によるコミュニケーションが当たり前になっていて、人とかかわるためには言葉が必要だ、と短絡的に考えてしまいがちです。しかし、まだまだ、語彙も少なく、人とかかわる経験の未熟な子どもたちにとって、言葉がどれほどの機能を発揮するというのでしょうか。言葉よりも、もっと根本的な人と人との触れ合いをたくさんしていくことが子どもたちにとって、何倍も大切なことなのでしょう。

自分の思いを出し合うことで生じるぶつかり合いも、相手は自分の思いどおりになるとは限らないという、相手の思いを知る大切な機会だと考えます。「相手の気持ちを感じる心」を持てるようになることで、受けとめ合いや認め合いができるようになり関係が深まっていくのでしょう。この「感じる心」を育んでいくために、その子自身が遊びを通じて、友達はよいものだなと思えるようになっていくのではないでしょうか。そして、教師は、子どもたちが人間関係の中で嫌な思いをしたときに、それを受けとめてプラスの経験にかえていけるように援助していく必要があるのだと思います。私自身が今、子どもたちに強く願っていることは「自分を好きになってほしい」ということです。

（練馬区立光が丘さくら幼稚園）